

特別支援教育を考える —— 研修会活動の実践報告 ——

山本正俊

Consideration about Special Support Education

—— Workshop Activity Report ——

by

Yamamoto Masatoshi

要旨

本稿では、筆者が管理職として携わった7年間3校の特別支援学校での実践をもとに、令和元年度新規採用教員研修会（山口県中学校・高等学校西部部地区）において、特別支援教育の視点から、生徒理解や資質向上を目的とした研修の報告である。

キーワード：特別支援教育、生徒理解、研修、資質向上

1 はじめに

特別支援教育という言葉が初めて制度的に位置づけられたのは平成19年度である。それ以前は特殊教育と呼ばれていた。特殊教育が障害のある児童生徒を主たる対象としていたのに対し、特別支援教育はそうした子どもだけでなく、知的な遅れがない発達障害の子どもも含め、より広い範囲の子どもを対象としている。つまり、特別支援教育はすべての学校・すべての教室で行われるものとなった。この転換の理由は通常学級にも35人中2～3人は特別な支援を必要とする児童生徒が在籍している実態から発達障害への何らかの対応が必要となったからである。障害のある人となない人の共生社会の形成が国際的な動きとしてあったことも転換の理由だった。図1のように全国的に児童生徒数は減少しているが、特別な支援を必要とする児童生徒数は増加していることがわかる。これ

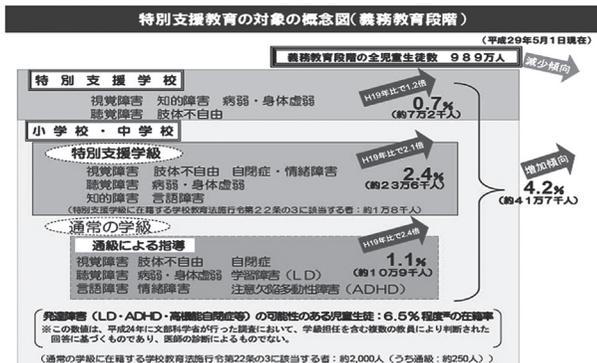


図1 文部科学省：特別支援教育の対象の概念図 H29.5.1

は、発達障害が広く知られるようになり、診断される子どもが増えたことも一因と言える。さらに、学習等への個別の支援を求めて特別支援学校が進路先の一つとして選ばれるようになり、園・小学校・中学校の就学・進路指導における特別支援教育の理解が大きな後押しとなったことも理由の一つとして考えられる。

このような状況の中で特別支援学校に勤務し、校内外の教員や保護者、関係機関の方々と連携して、児童生徒の支援に携わることができた。その経験をもとに、次の5つの学校体制づくりが大切であると考えようになった。

1 児童生徒が行きたい学校

安心安全で、授業が楽しくわかりやすく、友人や教員と過ごす時間の大切さを感じられる学校

2 保護者がぜひとも行かせたい、行かせてよかったと感じられる学校

保護者と教員の心通う対話をもとに、連携を大切にしている学校

3 地域の方が応援したくなる学校

地域の方が子どもたちの成長を見守ることができる学校

4 医療・福祉・労働等の関係諸機関が手をつなぎたくなる学校

子どもたち一人ひとりの将来の自立に向けて、連携して支援の充実を図る学校

5 教職員が楽しく元気に働ける学校

一人ひとりが各自の課題を抱え込まず組織で対応し、安心して働ける学校

このような支援体制を具現化するために、特別支援教育に携わる教員は子どもたちの思いを受け止めて見守っていく姿勢、子どものことを一番に理解している保護者との連携・協力が最も大切であると考えた。そして、この姿勢は、特別支援教育に限らず、様々な教育現場に必要な資質であるという思いを強くした。

2 研修会について

令和元年度9月に山口県西部地区中学校・高等学校新規採用教員34名を対象とした研修会が筆者の勤務校で開催された。まず、実際の授業参観を研修内容に取り入れ、教員が一人ひとりの子どもの自主性を重んじながらも、きめ細やかにチームで指導を行っている場面を見学してもらった。特別支援教育の現場を知ることが新規採用教員の今後の指導に役に立つことを願った。その後、講師として、これまでの筆者の経験をもとに、前章で述べた教員の姿勢について、次のように述べた。

① 通常の学級にも特別な支援を必要としている生徒がいる現状

平均すると学級は35人程度と考えられるが、在籍の中で数名に特別な支援が必要な生徒がいることを教育活動の中で把握することが大事である。対象の生徒がいた場合には、丁寧に状況を把握し、教員間で情報の共有をし、これまでの支援の状況を確認する。場合によっては保護者と連携しながら、生徒本人の困っていることに耳を傾ける。生徒が困っていると教員が感じたときこそが、特別な支援を必要とするスタートであること、それを組織で情報共有することが連携した支援につながる大きな一歩となる。例えば、いじめの対応には教員の感性・感性が大切と考えるが、特別な支援を必要とする生徒の理解についても同じであると考えられる。

② 教員一人ひとりが身に付けてほしい5つの力

1つ目は、授業を組み立てる力である。生徒にとって、わかる授業、楽しい授業を実現する。学力向上は、生徒の肯定感を高め、様々なことに挑戦しようとする力を育成する。

2つ目は生徒指導力である。開発的生徒指導、つまり、生徒がよりよく生きていこうとする力を信じ、個に応じた支援を組織的に行うことで、生徒の発達を支えていく生徒指導力を身に付けることが大切である。

3つ目は保護者に対応する力である。保護者に寄り沿い、思いを大切にし、共に子どもの成長を支えていく姿勢を持つことである。

4つ目は組織に貢献する力である。学校運営に参画し、教員が協働して学校目標の実現に向けて力を発揮しようとする事である。

5つ目は、援助希求力である。諸課題を一人で抱え込まずに、管理職や同僚に相談し、チームで対応していく考え方を身につけることである。

③ 保護者理解

保護者対応においては、日頃から寄りそう姿勢が大切である。例えば保護者からの要望やクレームがあったとき、何を求めているかを丁寧に傾聴することが必要である。その中で、保護者の思いが、不安の段階であるのか、不満であるのか、さらに進んで不信の段階であるのかを見極め、不信の段階に至る前に対応することが重要である。

これらのことは、筆者自身の実践や、研修等で学んだことを総合的にとらえた中から得た思いであるが、これから教員として様々な課題に向き合っていく受講者への心からのエールを込めている。

特別支援教育とは、単に障害児にどう教えるか、どう学ばせるかではなく、障害をひとつの

個性として考え、「支援を必要としている子 (children with special needs)」が、どう年齢とともに成長、発達していくか、そのすべてにわたり、本人の主体性を尊重しつつ、できる支援の形とは何かを考えていこうとする取り組みであると考え。大切なことは、児童生徒の言動だけを捉えるのではなく、思いや願いに寄り添い、「自己肯定感」を育む関わりをしていくことだと思ふ。このことは、実は、特別支援教育に限ったことではないのではないかと考える。受講者の学校には 30 人を超える生徒が学級に在籍している。学力や体力、性格等さまざまな特性を一人ひとりがもっている。一人ひとりがみんな違うという見方からの出発が、生徒の理解に必要であることを、特別支援教育の視点から伝え、このことが受講者の教員生活の中で何かのヒントとなれば幸いである。

講話終了後、受講者 34 名に感想を求め、その内容をまとめたものが次の図 2 である。

受講者 34 名中 24 名が、講話内容をもとに、どのように生徒を理解していくかについての感想を述べていた。具体的には次のような内容である。

- ・感性や感度を高めて、子どもの様子を見ていくことが大切だと思った。
- ・教育は子どもたちを理解すること。一人ひとりの課題に向き合っていることという言葉から、自分自身はどうだろうかと考えさせられた。きちんと向き合い子ども達を理解していきたい。
- ・教師側の考えを押しつけるだけでは教育にはならないと感じた。
- ・子ども一人ひとりに焦点を当てることにまだまだ努力と工夫が必要である。心から生徒を理解しているか、自問自答しながら日々子どもと向き合っていきたい。
- ・生徒一人ひとりを本当に大切に、決して見捨てることなく、向き合っていきたい。
- ・支援を要する生徒を自分のクラスに抱えていると、この子を「特別」だと考えていた。その子にあった指導を考え、その子の笑顔のために最善を尽くしたい。
- ・特別支援教育を特別のものとするのではなく、一般の生徒の中にいる困り感のある生徒や一般の生徒に対しても同じように考えていく姿勢が大切だと感じた。
- ・生徒一人ひとりに合わせた必要な支援ができるように、まずできることからスタートしようと思った。
- ・生徒一人ひとりを見つめ直すことの大切さを思い出させてもらった。
- ・生徒との信頼関係を築きながら理解するようにしたい。

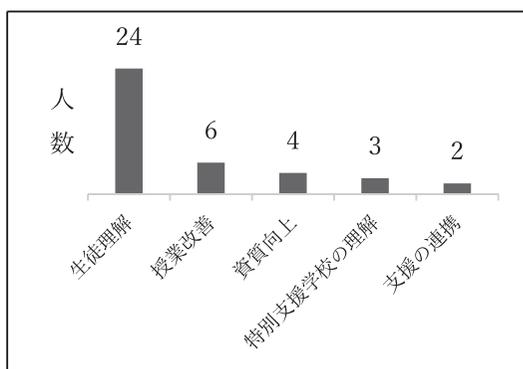


図 2 受講後に獲得した視点 (複数回答)

受講者の抱えている課題はさまざまであると予想できるが、講話内容をとらえて、前向きで、元気のある感想をうかがうことができた。困り感は教員も生徒も同じであることを本研修で考えられたことは、教員生活スタート時点でとても大切な経験であったと思う。また、特別支援教育の視点が、教育活動全般において大切なことだと理解したことは、今後の生徒への関わり方に役立ててもらいたい。「理解すること」は「決めつけること」でもなければ、「レッテルを貼ること」でもない。

「共感的理解」つまり、「そのままを受け入れる」という感覚に近い。理解ができれば、「子どもの今の状態から過去と現在について、考えることができ、将来へとつながる」と考える。

感想の中には、図2にあるように、少数ではあるが生徒支援の連携を述べたものがあった。その中に「教員として経験は少ないが、他の教員と連携をとり、これからの教員人生を歩んでいきたい」という言葉があった。受講者は新採用教員として、さまざまなことを学びながら生徒と向き合っている。時には余裕のない状況に陥り、疲弊し、自信を無くしてしまうこともあるだろう。そのような時に、周囲と連携して課題に向かう姿勢は、大変重要である。筆者のこれまでの教員人生においても、つながりが大切であった。特に特別支援教育に携わるようになってからは、保護者、地域の方々、関係諸機関、教職員との連携がいかに重要であるかを痛感している。力を寄せ合い教員が元気をもらうことは、最終的には生徒の成長を強力に後押しすることにつながる。このような受講者の感想から、筆者の実践から得られた思いが伝わったと実感できた。

3 終わりに

本研修で、筆者自身はマザー・テレサの「愛の反対は無関心である」という言葉を思い出した。教員は児童生徒が希望をもって健やかに成長していく過程を支える業務である。その実現にむけて、大切にしてほしい言葉である。愛があって、無関心でない教員は、「その子のかけがえのない良さを見つけて気づかせる」ことができる。「美点凝視」である。どの子にも長所がある。その長所を発見し、感動し、感じてあげることだと考える。「本当にすごいな」と気づいてあげる。

今後は、若い教員が特別支援教育の視点にたって、各障害特性を理解し、教育的取組の方法(技術)や専門機関との連携、保護者支援に役立つコミュニケーションの技術を習得し、支援をすることに、本研修がその一助になればと願う。

参考資料

- 1) 図1:平成30年度公開プロセス資料 文部科学省